

ネイチャー高知

No17 2000年7月23日発行

ホタル探し——— ホタル観察会

衣笠 雄一

先日、鏡川支流で子どもたちが地元の水辺でホタルを観察する企画があり、僭越ながら、私が先導役で皆さんを案内することになりました。現地は、市街地と水田の中を鏡川から引かれた水が流れているという環境で住宅が建ち並ぶ中、身近にホタルが観察できるという高知市内では得難い場所となっています。地元の方々もこの場所で見られるホタルを大変大切にされていて、採集することなく大切に見守っています。最近、新聞紙上などでホタルの生息地が具体的な地名とともに掲載されると、ホタルを採集しようとたくさんの人がおし寄せ、たちまち捕り尽くすほどに捕られるということもよく話題になることから、ホタルを含め貴重な生物の生息地を知らせることには大変用心深い気持ちになっています。

さてホタル探しの2日前。夕方、薄暗くなるのを待つて下見です。ホタルの生息する流れに沿って堤を歩きます。水深は10センチ。川幅は3メートルほどでしょうか。市街地の中を流れているために、水面近くに街灯や人家の明かりが揺れて、とてもホタルが生息できる環境ではありません。ホタルの生息繁殖には、人工の光は大敵だなとつくづく思います。それでも諦めずに川上に歩いていくと、やっと光の差さない場所にいきつきます。しかし、残念ながらホタルの成虫が隠れたりねぐらにできそうな草原や木陰がありません。ホタルの光を目を凝らして探しますが、街頭の明かりが日について探しにくいこと探しにくいこと。

やっと10匹程度のゲンジボタルの光を目にできたのは、土の土手の大きな木の茂みがある人家の光りが差さない場所でした。土の土手にはセリ等も茂り、ゲンジボタルが産卵できそうな、コケの生えた場所もあります。しかしそんなホタルの生育できそうな区間は川の長さにして、20メートルほどでしょうか。今年ホタルが見られても来年はどうなる

かまったくわからないような環境です。川そばの2、3本の木を切り払うだけでホタルの生息地としての環境は失われてしまいそうです。ちょっとした河川改修でホタルは見られなくなるだろうなと思いました。この場所での繁殖は、きっと数つがいなんだろうと思います。しばらく川端につくなんて見ているとオス、メスらしい2匹が折り重なるように土手で光り合っているのが観察できました。上流で鏡川の水を引き入れているので、あるいは、この場所では繁殖できず水の流れにそって流れてきただけのゲンジボタルなのかも知れません。しかしこの場所での繁殖の可能性も否定できないような気持ちになりました。

しばらくすると向こうからお孫さんらしいこどもの手を引いたおばあさんが歩いてきます。ふと、こどもの手元をみてどきっとしました。こどもが下げたビニール袋のなかにゲンジボタルが10匹ほども光っています。お話を聞いてみるとやはりここで捕ったホタルとのこと、地元の方は、ホタルがいても捕らないようにしていることを聞いていたので意外な気がしましたが、どうもお孫さんのためにと採集したもののようなようでした。地元主催のホタル探しで、ホタルを見に地元のこどもたちがこの場所にホタルを観察にくることなどをお話して、大変大変、気の毒には思いましたが、快くホタルを元の場所に放していただきました。

さて2日後のホタル探し当日。あいにくの雨。主催者としてはやきもきします。幸いこどもたちは、同時に開かれた紙芝居やゲーム、夜店を楽しんでいます。一緒に回っていただく大石佳三さんと雨のなか川沿いに歩き直前の下見をしました。いません。やっと見付けたオス一匹。さらにメス一匹。その内1匹のメスは流れに落ちて下流に消えていきます。この川の下流にはゲンジボタルが生息繁殖できるような所はありません。大石さんが必死に水面から救いだそうと流れに沿って走りますが、とうとうどこへ行ったものかわからなくなってしまいました。地元の方が言われるには前日に車で乗り付けてホタルを捕っていった人がいたとのこと。雨も重なりどうもよくありません。観察できない場所に小さなこどもを連れていくのもどうかと思い、相談の上この日のホタル探しはとりやめにしました。こどもたちは紙芝居とゲームの後帰って行きました。

こどもたちとのホタル探しはできませんでしたが色々と考えさせられました。

ゲンジボタル等の採集は営利目的でなければ規制されているものではないけれど、生息

場所によっては、わずかな環境の変化や採集によって種が絶えることもあるということを強く感じました。

かといつて、小さな子どもたちにまで、生物採集の機会を制限することは子どもが生物や自然環境に接し、豊かな情操を育てる機会を奪ってしまいかねません。今回の2日前の下見の時に会ったおばあさんとお孫さんが思い出されました。本当は、幼いときにおばあさんに手を引かれ、ホタル採集に熱中した経験のあるお子さんが、将来身近な自然環境に敏感な大人に育っていくのではないかと思います。

一緒に下見していただいた大石さん。当日直前の下見でただ1匹発見されたメスのゲンジボタルを追って一心に駆け出すほどの気持ちや情熱は、本物のホタルの光に魅せられ我を忘れて光を追い掛けたくさんのホタルに出会った経験なしには、成り立たないものではないでしょうか。

最近、身近な公園のなかに子どもたちが草原や水辺などの自然に親しめる環境を積極的に作り出していこうという取り組みをよく見聞きます。そういった取り組みが今後も続いていくことを願っています。豊かな自然環境は、生物に親しみ愛着を持つた子どもたちが将来作り出し守っていくものだと思うからです。

野鳥の違法販売容疑で市内 2 店舗の小鳥店を摘発

[西村公志]

捕獲、飼養が厳しく制限されている国産メジロを外国産メジロと偽って違法販売、違法飼養している事例が、県内でも後を断たないので、6月28日高知警察署、高知県及び高知市が、高知市内の小鳥店を2店舗同時に摘発しました。

当日は、高知警察署の捜査員のほか高知県森林政策課、高知市環境保全課の担当職員が立ち会い、N小鳥店、M小鳥店の2店舗合わせて店頭で販売されていたメジロ24羽の他、オオルリ2羽、ヤマガラ5羽、キビタキ4羽、ウグイス1羽の計36羽の野鳥が押収されました。

今回の事件は、昨年の島根県安来市の事例を参考に、6月26日に2店舗からメジロ各1羽を支部が購入。環境庁標識調査員の岩田篤志さんご夫妻(香川県支部)に、直接高知警察署お越しいただき鑑定していただきました。鑑定に際しては、高知県・高知市の担当者も同席されました。この2羽のメジロについては、いずれも国産メジロと鑑定され、鑑定後すぐに放鳥しています。

この鑑定を受けて高知警察署では、国産メジロを違法に飼養販売していたとして、2店舗に対して正式な捜査令状を取り、28日の家宅捜索となりました。小鳥店の家宅捜索には、高知新聞社・RKC高知放送も同行。夕方からのテレビニュースで県下に報道され、当日の高知新聞夕刊にも記事が掲載されました。

そして、7月5日に6月28日に高知警察署で押収されたメジロ等の鑑定が行われました。鑑定に際しては、香川県支部の岩田さんご夫妻に再度高知警察署にお越しいただきました。詳細な鑑定結果については下記のとおりです。

(1) M小鳥店

押収されたメジロ15羽中、輸入証明書がついていた3羽については、ヒメメジロと鑑定されました。ヒメメジロをじっくり見るのは初めてでしたが、顔が明らかに国産メジロとは異なっていて、国産メジロとヒメメジロは、外見でも識別できると感じました。岩田さんからは、ヒメメジロの特徴を教えていただき、たいへん勉強になりました。

鑑定終了後、国産メジロ12羽については即日放鳥。輸入証明書付きのヒメメジロ3羽については、後日小鳥店に返されることになりました。

(2) N 小鳥店

押収されたものの内訳は、メジロ 9 羽、キビタキ 4 羽、オオルリ 2 羽、ウグイス 1 羽、ヤマガラ 5 羽(うち 3 羽は、幼鳥)で、メジロはすべて国産と鑑定されました。ウグイスについては、環境庁から正式にマニュアルが発表されていないので、鑑定は見送りました。

キビタキのうちの 1 羽は、一時収容されていた動物園で 6/30 に落鳥。また高知警察署内で、ヤマガラ 1 羽が逃走しています。鑑定終了後、メジロ 4 羽、キビタキ 2 羽をリハビリのため里親さんである大野貢さんに預けることとし、残りは放鳥しました。

鳥獣保護関連の分野でも、今年の 4 月以降に県から市町村へ移管された事務が多くあります。今回は高知県・高知市の双方が関わってくれたおかげで、非常にスムーズに物事が進みました。特に、森林政策課の吉川鳥獣保護班長さんには、担当となって間もないにも関わらず積極的に対応していただき、高知警察署や高知市等の関係部署との連絡調整にもご尽力いただきました。高知警察署生活安全課の皆さんも多忙な中、迅速かつ適切な対応をされ、この度の摘発事件の大きな原動力となりました。県立のいち動物公園、わんぱーくこうちアニマルランドの皆さんにも通常の業務でお忙しい中、押収された野鳥たちを一時収容していただきました。

また、なにより香川県から高知まで 2 度にわたって鑑定にお越しいただいた香川県支部の岩田さんご夫妻のご協力がなかったなら、こんなにスムーズに事が運ばなかつただろうと思います。この度の事案に関係された皆さん全員に、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。[以下、2000/6/28 付け、高知新聞夕刊の記事]



なぞのキクの正体判明 セネキオ・マダガスカリエンシス

澤良木 庄一

さきに「ネイチャー高知」No. 13 (1998年9月10日発行)で報告した「なぞのキク」の身元が判明した。この植物は、四万十川の河口に流入する竹島川の支流鍋島川の河岸や休耕田などに分布していて、平成8年1月、山崎憲男氏によって発見された。キク科セネキオ属のキクで、恐らく帰化植物であろうという一種である。

この植物について、富山県立中央植物園の中田政司氏に同定を依頼していた。中田氏はキク科の分類が専門で、たまたまNHKの足摺岬の植物の取材に同行されていた時、お目にかかったのがご縁である。しかし国内にきめ手となる情報もなく、年が過ぎていたが、本年(2000年)の正月、中田氏からの年賀状に、例のセネキオ属のキクが、鳴門に分布しているものと同じものではないかと思うとの添え書きがあった。そこで徳島県に手配しようと思っているうちに、つい日がたってしまった。ことしの5月なかば、坂本彰氏より「なぞのキク」に関することが、徳島より報告されたとの記事が朝日新聞に出ているとの連絡を受けた。そこで早速、中村通信局長の河村司郎氏に依頼して記事の確認をしたところ、平成12年4月23日付朝日徳島版で、このキクが報道されていて、内容から「なぞのキク」も同じ種であることが判明した。

学名「*Senecio madagascariensis*」 キク科セネキオ属の一種で、原産地は遠くアフリカ、マダガスカル島からの帰化植物である。和名「ナルトサワギク」は、鳴門市で発見されたとき、とりあえず名付けた名前という。

このキクは、鳴門市瀬戸町の日出湾埋め立て地で、鳴門市立大津西小学校長の木下覚氏が1976年に見つけた。この埋め立て地は、緑化のためシロツメクサなどの種子を播いたようで、その種子の中に、このキクの種子が混在していたらしい。その播かれた種子が、アメリカから輸入されたものらしいという情報から、米国スミソニアン博物館に標本を送って同定を依頼し、本種の正体が判明したという。

四万十川下流域では、このキクが生育し続けていて、多少被度の低下はあるものの、分布域は拡大している。最近では民家の庭先や石垣などにも、本種の黄色い花を見かけるようになった。高知県では横浪三里や、琴ヶ浜など海岸地帯に分布しているほか、内陸部からの未確認情報もある。この年中無休で、雪の中からも黄花をのぞかせるしたたかなキクは、四国をはじめとして、今後さらに分布域を拡大していくものと思う。(中村市入田 3205)

ナルトサワギクが *Senecio madagascalengs* であることを明らかにした、徳島県立自然史博物館小川誠さんのホームページを紹介します。

今月は文化の森に生える花ではありませんが、ナルトサワギクについて紹介します。

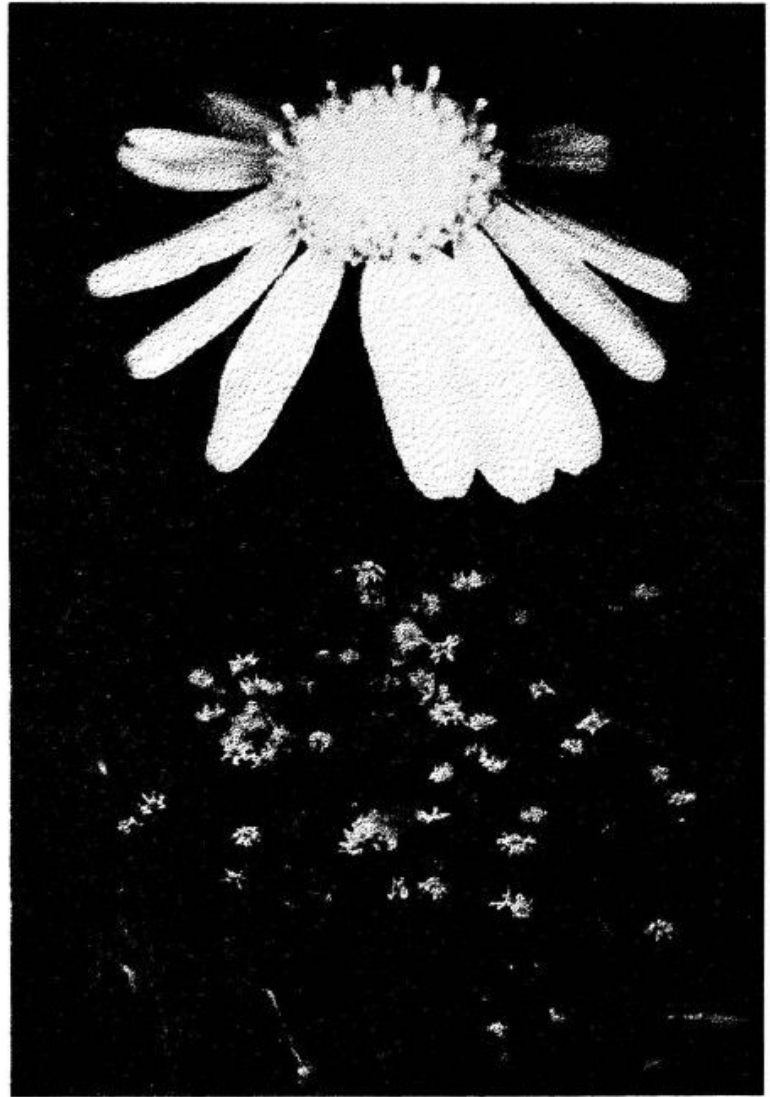
■ ナルトサワギク

Senecio madagascariensis Poiret

ナルトサワギクは1976年に鳴門市瀬戸町で見つかった帰化植物です。埋め立て地の緑化の種子に混じって広がったものですが、花の特徴からサワギク属の一種であることがわかりましたので、ナルトサワギクと名付けられました。しかし、サワギク属は世界で2000種を超えるといわれており、その学名はわからないままになっていました。学名がわからないと、この植物がもともとどこに生えていて、どんな植物で、どのように広がっているのかといった正体を調べることができません。

その後、ナルトサワギクの学名が幾度か発表されましたが、どれも確証に欠けていました。ところが、1996年に、徳島県立博物館に収蔵されていたアルゼンチン産の標本の中にナルトサワギクと同じも見いだされました。そのラベルには *Senecio madagascariensis* Poiret という学名が書かれていました。また、徳島県植物研究会の会長である木下覚氏が、アメリカのスミソニアン博物館にナルトサワギクの標本を送り同定を依頼していたところ、1997年に同博物館の Harold Robinson 博士からその結果が戻ってきて、それも *S. madagascariensis* と同定されていました。さらに、同博物館に滞在中の富山市科学文化センターの太田道人氏により、多くの情報が寄せられました。こうして、発見から20年以上たって、ナルトサワギクの学名が *S. madagascariensis* ということが明らかとなり、インターネットなどを通じてその情報が集まるようになりました。

毎年、たくさんの生き物が外国から入ってきますが、その正体をさぐるのはとても難しいことなのです。



2000年5月11日

徳島県石井町東覚円吉野川で撮影

木下覚・小山博滋・小川誠・太田道人．1999．帰化植物ナルトサワギクの学名．植物分類・地理，50(2):243-24

自然観察会のお知らせ

田代世話人の提案でキノコの観察会を次のとおり開催します。

日時 2000年9月3日 午前9時30分から

場所 越知町横倉山

9時30分に横倉山最上段の駐車場に集合

講師 近安和雄(高知大学講師 キノコ担当)

佐田博子(土佐植物研究会 植物担当)

持ち物 山を歩ける服装でお弁当。お茶等持参。ルーペ、双眼鏡があれば便利

申込・問い合わせ先 田代松幸 世話人 TFL0880-43-1243

なお、この観察会は「森の案内人クラブ」と共同開催になります。

全国自然調べに参加してみませんか

NACS-Jでは1995年から全国自然調べを行っており、今年は「私たちの川」をテーマに行います。

高知県は全国でも有数の「自然の川」が残っている県と言われています。このことが果たしてそのとおりなのか、会員の皆様の身近にある川を全国的なレベルでチェックしてみるいい機会になるのではないのでしょうか。

また、子供さんの夏休みの宿題として、家族で取り組んでみるのも面白いと思います。

調査のためのマニュアルは連絡会の事務局にありますので、電話或いはFAXで申してください。

なお、マニュアルはNACS-Jのホームページ <http://www.nacsj.or.jp> にも掲載されており、そこからも入手できます。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報 No17

事務局 高知市朝倉南町 3-51-1 坂本彰方

TEL&FAX 088-850-0102

E-MAIL akira@baobab.or.jp